



2013年5月20日(月) 開催

テーマ:「人間本性に基づく政治・社会(意識の変容をキーワードに)」

報告者: 藤 和彦(主任研究員)

概要

超高齢社会に突き進む日本、四半世紀後には年間死亡者数がピークを迎え(2039年に167万人、2011年は125万人)、いわゆる「少産多死社会」となる。2050年には後期高齢者の割合は23%超となり、「地域密着人口(14歳以下、65歳以上の人口)」が5割となる(2011年は37%)。世界の総人口も2040年代初めに81億人をピークに減少し始めるとの予測があり、トップランナーである日本は「高齢社会」のモデルを構築することが世界に対する責務と言えるような状況にある。

このような状況下で最近「松井秀喜に代表される世代が中核を担う四半世紀の日本は、精神性が高い社会となる(伊集院静)」とする論評が出始めている。若者の価値志向は「非貨幣的であり、『自己実現』ではなく『世界実現』である(広井良典)」だという。

「検索機能が飛躍的に向上したため、『知っていること』の価値が減衰し、『誰かを尊敬する』という感覚が喪失した」とする黒崎政男は、生活の隅々までコンピュータが浸透したことで、プライバシー、ひいては、「個人」という発想自体が消滅する可能性を指摘する。平野啓一郎も『個人』という概念は近代の発想であり、この概念の大雑把さがゆえにコミュニケーションが複雑になっている」として、「個々の関係毎に『分人』を設定し、『個人』はその集合体である」とする「分人主義」を提唱している。

「2052 今後40年のグローバル予測」の中には、「『物質つまり実際に目で見ることができるもののみが真の現実だ』という考え方は消え、人々はこれまでとは違う形で自らの存在を経験するようになる。意識の啓発それ自体が目的になり、大人になった後も人生が意義深く充実したものになるよう、さらなる成熟を模索するため、この分野の方法論の開発・研究が盛んになる可能性がある」という根本的な心の変化が起きるとの分析があるが、以下「意識の変容」の可能性について見ていきたい。

「近代のイデオロギーである資本主義は特異な形態の宗教である」とする蛭川立は、貨幣を至高な呪物として崇拝する資本主義経済への信仰は、因果性の原理に基づく高度な科学技術を武器にして、既成宗教の権威を破壊しつつ、その勢力を地球規模で広げてきたが、ウパニシャドが最も覚醒状態であるとする「第4の意識状態(宗教の神秘体験やマズローがいう「至高体験」に近い意識状態、変性意識状態とも言う)」が存在すること自体を異常とみなして

きたという。「資本主義と科学技術の爛熟した時代の中で、『第4の意識状態』が宗教という装置の検閲を経ない生の形で経験される状況が生まれている」とする蛭川は、救命医療の飛躍的な進歩が逆説的なことに臨死体験者を増加させていることに注目する。象徴的な「死と再生」を経験した臨死体験者は、資本主義的な競争原理への関心を低下させ、神秘的な経験への関心を深めるが、彼らは「組織的な宗教よりも、呪術的、シャーマニズム的な世界により親和的になる」からだという。

「意識の変容」を最先端の科学はどうみているのだろうか。「1990年代に、fMRI等が発達したことにより、人間の精神の働きが脳の広い範囲で生成する神経ネットワークの活動に深く関わっていることが判明した」とする永沢哲は、変性意識状態において、本能を司る脳幹と情動を司る大脳辺縁系、そして知性を司る大脳新皮質の間に統合が起きるといふ。さらに、もともと共感能力のある人間がそれを発揮できないのは「恐怖の体験」のせいであるが、東洋の瞑想の伝統は、利他性に基づいて行動する「トランスヒューマン」達が生まれ出るのを助ける有力な方法であるという。

精神分析を筆頭に「意識の変容」に対して否定的な立場であった西洋科学も「ストレス・リダクション効果を認め、心理療法の補助として位置づけるようになった」とする安藤治は、瞑想研究の魅力は、「現代『神秘』という名で位置づけられずにきた、深遠かつ偉大な英知と呼ばれる人間の可能性を探っていくことにある」と指摘する。現代社会は発達論的に見て青年期への固着とみなせる心理的特徴があるが、「20年後、50年後には、今の時代には考えられないような意識から物事が捉えているかもしれない」とする安藤の指摘は興味深い。

「現在、破壊が最も深く進行しているのは、物的環境よりも人類の心。近代科学は物質の世界を支配する普遍的な法則を発見したが、心の世界の奥にある普遍的な真実はまだ十分に明らかになっていない。このアンバランスが現代の不安の底にある」とする湯浅泰雄は、「ウエーバーは内面的動機から社会的行動様式の形成に至る心理的過程を意識のレベルにおいて問うているのに対し、ユングは無意識の情念のあり方に即して同じメカニズムを問うている」として、人間性にとって本質的なものを見失い、民衆の集団的情念の噴出をコントロールする手段を失った欧州に端を発する近代思想の暗部を指摘する。

ユングは「正義の怒りに燃えて他者を攻撃すればするほど、心の『影』の領域には、怒りと怨恨のくらい情念の火が燃え上がる」としたが、ヒトラーは当時のドイツ人の人格の劣等部分である影の巨大な人格化だったのだろう。深層心理学の考え方に従えば、「意識のレベルに現れた心理作用は、社会現象の制約の下にあるが、無意識のレベルで働いている心理作用は社会現象よりも深いレベルにまで入り込んでいる」のだとすれば、我々が為すべきことは、道徳的意識の要求をしばらく撤回して、こころの深層領域からひらかれてくる力のあり方をあ

りのままに体験し認識していくことではないだろうか。

超高齢社会において、死ぬ間際まで自分の精神をできる限り高めておくことを目標として、林住期(50～74歳)を社会的に設定し、これへの円滑な移行に資する通過儀礼(心の雑音を下げ、他者との関わりの貴重さを体感)を作り出していく必要があるのではないだろうか(高齢者へのメッセージを中心とする「国民典範」を制定するのも一案)。

政治のリーダーシップの不在が叫ばれて久しいが、「日本人は、教義や信条や思想を判断する場合、けっしてその思想の論理それ自体によって評価を下そうとはしない。その信条や思想を信奉している個々の人間の具体的な行動に基づいて判断する」という湯浅の指摘が事の本質を捉えている。中曽根康弘はかねてから現代の政治家に対し、座禅を始めとする精神修養の必要性を主張しているが、政治に携わる者は、政策の作成能力ばかりではなく、政策の実現力を高める人間力を高めるための自己修養を行うべきである。これこそプラトンが理想とする「哲人政治」なのだから。

以上